

## 仕える愛と救う愛

(ヨハネ三・一〜一五)

「愛唄 (Greene)」 「愛をこめて花束を (Superfly)」 「愛のうた (伴田来未)」 「愛のかたまり (Kinki Kids)」 そして ATUSHI もカバーした女王、美空ひばりの「愛燦燦」。以上は通信カラオケ大手、ジョイサウンドの検索にかかった三三七六曲ある「愛」で始まる歌の人気ベストファイブである。カラオケ屋だけではない。本屋にも、コンビニにも、ネット上にも「愛」「LOVE」「サラン」「amore」は溢れている。しかしそれで現実世界が愛に溢れるようになったかといえはなはだ疑問である。こんな洪水のごとき愛の奔流の中で真実な愛を見つけるのは難しい。ましてや「愛するってことは難しい (佐野元春)」のである。

聖書は愛の本。キリスト教は愛の宗教。そして神は愛なりという。では神の愛とはどのようなものなのだろうか。今朝は父なる神のみこころに従い、その性質を私たちにこれ以上なく明らかにしてくださったイエス・キリストの弟子たちを愛する姿から神の愛の性質について二つ学びたい。

## 一、奉仕する愛

イエスの洗足の物語は一節にある「その愛を残るところなく示された」という福音書記者の解説に続いて書かれているのだが、その描写は実に細かい。「立ち上がる」「脱ぐ」「取る」「まとう」「水を入れる」「足を洗う」「(その足を)拭く」と七つもの動詞を用いているのだ。しかしなぜ福音書記者はこのような描写に訴えたのだろうか。「イエスは愛した」で十分じゃないか。確かに論理的にはそれで十分だ。しかし愛というのは具体的な行動の中に見えるもの。おそらく本福音書の記者には救い主が間もなく十字架につけられるときに行った一つ一つの動作を克明に記すことよつて、弟子たちを「極みまで(文語訳)」愛されたイエスの姿を読者に思い起こさせようとする意図があつたのだろう。考えてみよう。この宴席はイエスの死の直前である。弟子たちの訓練は三年にも及んでいた。しかるに彼らは足を洗う奴隷がないという状況下で、互いに愛し、つかえあうことが出来なかつた。失格である。愛の教師であつたイエスにとつてそれは敗北を痛感させられる瞬間だつたかもしれない。しかしイエスは彼らの不明を糾弾するでもなく、嘆息するでもなく、黙したまま行動し、奴隷の姿になつて弟子たちに仕えられたのだ。ここに愛がある。

## 二、救う愛

イエスは弟子たちのほごりにまみれ、およそ綺麗とは言えない足を洗われた。一人、また一人とイエスに呼ばれ、足を洗われる弟子たち。そうしてついにイエスの一番弟子をもつて自任するペテロの番になつた。師であるイエスの前に自らの垢と埃にまみれた足を洗ってもらうのが忍びなかつたのか、はたまたほかの弟子たちがイエスを跪かせ、恩師に奴隷の奉仕をさせているのに義憤を感じたのか、ペテロは「決して私の足をお洗ひにならないでください。」と言つた。

この一見殊勝にも見えるペテロの提案をイエスは「もしわたしが洗わなければ、あなたはわたしと何の関係もありません」と言つて拒絶した。なぜだろう。ペテロの足はイエスによつて洗われることが必要だつたからである。何のために。イエスと関係をもつためにである。どのような関係か。もちろん愛の関係である。こう考えていくとイエスが弟子たちの足を洗つたのは私たちに對して愛の模範を示すためでもあつたが、同時に主ご自身が彼らと愛の関係を結び、そのけがれを洗い流すという救いを表すものでもあつたことがわかる。イエスの弟子たちに対する、またこの世に対する愛の奉仕は世を救うというゴールを常に見据えていたのだ。

\* \* \*

「この方以外には、だれによつても救いはありません。天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人に与えられていないからです。(使徒四・一二)」とのちにペテロが語つたように、人が救われるためには、真の愛を受け取るためには他ならぬイエスに洗つてもらわなければならない。かの日ペテロがイエスに足を洗つてもらつたように、私たちも先ずそのままの姿でイエスの前に出ていくことが肝要だ。その時私たちとイエスの間には愛の関係が生まれる。これが救いだ。しかしイエスは弟子たちがそこに留まつていることを良しとはされなかつた。洗足を終え、再び師が座るべき座に就いたとき、イエスは弟子たちに足を洗いあうことを命じられたのだ(一四節)。儀式としての洗足を意味するのではない。また私たちが仲間を救うために洗うということでもない。その真意は主の弟子たちがイエスがしたように互いに仕え合い、奉仕しあうということだ。上に立つことを至上の価値とするこの社会にあつて謙遜に仕えることは常ならぬこと。だがそれこそがイエスの道だ。洗われたその足で、イエスの救いを伝え、仕えるものになりたい。